

# 『現観莊嚴論』注釈書に引用される『般若経』

——三智の行相の用例を中心として——

庄司 史生

## 1 はじめに

チベット語訳『二万五千頌般若経』には、カンギユル所収のもの（PVSPK）とテンギユル所収のもの（PVSPT）とが現存している。後者は『現観莊嚴論』（AA）に基づく科文の挿入がなされた後のテキストである。これは現存するネパール系梵本（PVSPS）と近似する<sup>(1)</sup>。一方、チベット語訳『八千頌般若経』にはカンギユル所収のもののみが現存しているが、これにもまた2種の系統が確認される<sup>(2)</sup>。それは、AAからの影響を受けて経文に改変がなされる前のテキスト（ASPA）と、改変がなされた後のテキスト（ASPB）とである。このうち、後者が現存するネパール系梵本（ASPS）と近似する。従って、AAからの影響の有無という点で、PVSP系統とASP系統とは次のように分類される。なお、このような分類を明確にし得ることは、チベット語訳般若経がまとまったかたちで現存していることによって知りえる事実であることはいうまでもない。

【表1】AAからの影響を基準としたPVSP系統とASP系統の分類

	AAの影響	現存テキスト
PVSP系統	無	PVSPK
	有	PVSPS/T
ASP系統	無	ASPA
	有	ASPB/S

さて、以上のようにPVSP系統とASP系統それぞれに2種の系統が現存していることは先行研究によって指摘されたものとして、ここでの再説は避ける。ここではAAからの影響の有無に基づく般若経の系統分類に関する補足として、その傍証となるものを提示することにした。これら両系統の般若経に対する注釈書の引用経文を調査することによって、各般若経の成立次第関係を明らかにするひとつの手掛かりを得ることができるものと考えられる。本稿では、AA第四現観における三智の173行相<sup>(3)</sup>を用例としてとりあげ、同箇所において各注釈書が引用している経文が上記の何れの系統のものであるかを検証する。

## 2 三智の173行相の典拠

AAは、本来PVSPに対する注釈とされたとおり、173行相の内訳はPVSPの経文に求められることになる<sup>(4)</sup>。現存最古のAAに対する注釈書であるアーリア・ヴィムクティセーナ（6-7c.）

の AAV は、173 行相の内訳をそれが依拠した経文とともに示している<sup>(5)</sup>。173 行相の定義を簡潔に示すのはハリバドラ (8-9c.) の AASV であるが、そこで定義される 173 行相は現存している PVSP と一致しない箇所 (第 2 番目の行相の定義) があり、それは既に兵藤氏によって指摘されている (兵藤 2000, 184)。本稿では、AASV が PVSP 経文の記述とは異なる定義をなした背景を探ることもかねて、173 行相中の特に上記箇所の記述を例としてとりあげる。

### 3 PVSP の経文と釈文

173 行相に関して PVSP 経文と AASV の定義との間に相違が生じていた箇所について、以下に PVSPK と PVSPT を提示し、その後に注釈者による釈文を確認する。PVSPS は PVSPT とほぼ一致しているため、PVSPS は注にて示す。以下引用文中の [ ] や下線は引用者による。

#### 3.1 PVSP 経文の記述

はじめに、PVSPK の経文は以下のとおりである。

gsol pa/ bcom ldan 'das 'di lta ste/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ni [2]mnyam pa nyid kyi pha rol tu phyin pa'o' / bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa/ chos thams cad mnyam pa nyid kyi phyir ro' / (PVSPK, D9(Kha) 217a2-3; P731(Thi) 3a7-8)

[スプーティは] 言った。「世尊よ、つまりこの般若波羅蜜多は [2] 等しいことという波羅蜜多である」世尊は仰った。「一切法は等しいからである」

このように、PVSPK では 173 行相の [2] について「等波羅蜜多 (mnyam pa nyid kyi pha rol tu phyin pa)」と述べる。次の PVSPT では、PVSPK よりも若干経文が詳しくなる。

rab 'byor gyis gsol pa/ bcom ldan 'das 'di lta ste/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ni [2]mnyam pa nyid kyi pha rol tu phyin pa'o' / bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa/ chos thams cad mi dmigs par mnyam pa nyid kyi phyir ro' / (PVSPT, D3790 (Nga) 167a7-b1; P5188 (Nga) 194b8-195a1)<sup>(6)</sup>

スプーティは言った。「世尊よ、つまりこの般若波羅蜜多はまさに [2] 等しいことという波羅蜜多である」世尊は仰った。「一切法は認識されないことに等しいからである」

このように後者の PVSPT では、「般若波羅蜜多は [2] 等波羅蜜多である」とのスプーティの発言に対して、世尊は「認識されないこと (mi dmigs pa, anupalabधि) に等しいから」と答え、PVSPK に対して下線部が付加されていることがわかる。ここでの PVSPK と PVSPT との差は恣意的なものとの印象を与えるかもしれないが、古形を記す漢訳を参照するとそれらは全て PVSPK と一致している<sup>(7)</sup>。

なお、スプーティが「この般若波羅蜜多は  $x$  という波羅蜜多である」と述べ、それに対して世尊がその理由として「 $y$  であるから」と答える問答形式は定型句化しており、173 行相の各項目はこの  $x$  にあたる箇所を採取したものとなる<sup>(8)</sup>。

#### 3.2 釈文の記述

AA に対するインド、チベットにおける注釈文献については先行研究に詳しい<sup>(9)</sup>。ここではハリバドラ以前のアーリア・ヴィムクティセーナ、[バダンタ・] ヴィムクティセーナ、そしてハリバドラ、その後のラトナーカラシャーンティ (11c.) によるものを確認する。以下 AA 本

頌はボールド体、経文引用はイタリック体、本頌引用はボールド・イタリック体で示す。

### 3.2.1 AAVの解釈

はじめに、アーリア・ヴィムクティセーナは前掲のPVSPの経文を引用しつつ、次のように注釈している。

da ni rnam pa kun mngon par rdzogs pa rtogs pa brjod par bya ba yin pas/ **gzhi shes pa yi bye brag rnam**/ / **rnam pa zhes bya mtshan nyid de**/ / (IV-1ab) zhes bya ba gsungs so/ / dngos po la dmigs pa ni **gzhi shes pa'o**/ / **bye brag** ni mi mthun pa'i phyogs gang gi gnyen po'i **mtshan nyid** gang yin pa ste/ dper na rtag par 'dzin pa la mi rtag pa la sogs pa bzhin no/ / gnyen po'i phyogs kyang thams cad mkhyen pa nyid gsum gyis bsdus pa yin pas/ **kun mkhyen nyid ni rnam gsum phyir**/ / **de ni rnam pa gsum du 'dod**/ / (IV-1cd) ces gsungs te/ **rnam pa** zhes bya ba'i tshig go/ / de la 'phags pa'i bden pa bzhi rten du byas te thams cad shes pa nyid gsum gyi skabs kyi bden pa gang la rnam pa ji snyed yod pa de ston pas re zhiig thams cad shes pa nyid kyi dbang du mdzad nas/ **med pa'i rnam pa nas bzung ste**/ / **mi g-yo ba yi rnam pa'i bar**/ / **bden pa so so la bzhi dang**/ / **lam la de ni bco lngar bshad**/ / (IV-2) ces gsungs pa yin no/ /

de la sdug bsngal gyi bden pa'i rnam pa bzhi'i dbang du mdzad nas gsungs pa ni/ [1] *bcom ldan 'das 'di lta ste/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ni* [1] *ma mchis pa'i pha rol tu phyin pa'o/ / rab 'byor nam mkha' med pa'i phyir ro zhes bya ba ste/ mi rtag don ni don med don/ / zhes bya ba'i tshul gyis so/ / [2] shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ni [2] mnyam pa nyid kyi pha rol tu phyin pa'o/ / chos thams cad mi dmigs pa mnyam pa nyid kyi phyir ro zhes bya ba ni sdug bsngal ba'i don mi skye ba'i don zhes bya ba'i tshul gyis so/ / [3] shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ni [3] dben pa'i pha rol tu phyin pa'o/ / mtha' las 'das pa stong pa nyid kyi phyir ro zhes bya ba ni stong pa'i don ni dngos po med pa'i don to zhes bya ba'i tshul gyis so/ / [4] brdzi bar bya ba ma yin pa'i rnam pa nyid kyi chos mi dmigs pa'i phyir ro zhes bya ba ni bdag med pa'i rnam pa yin te/ de ni mu stegs thams cad dang thun mong ma yin pa'i phyir ro/ /*

(AAV, C126b3-127a3; D119a3-b3; G168b5-169b2; N127b6-128a6; P139a7-140a1)

今や、一切相現等覚が説かれるべきである。よって「事〔とそれを知る〕智には諸種があり、〔それらの〕行相が〔その〕相である (IV-1ab)」といわれるのである。事物に対して所縁となるものが「事〔を知る〕智」である。「種 (bye brag)」というのは所対治のことである。その能対治の「相」はどのようなものかという、譬えば「誤って」常住と把握することに対する無常等のようなものである。能対治はまた、三つの一切智性によってまとめられる。よって「一切智性は三種であるからそれは三として望まれる (IV-1cd)」といわれ〔それらを〕「行相 (rnam pa)」という語 (tshig) であらわす。そこで四聖諦が拠り所とされて、三つ〔各々〕の一切智性の時の諦にはどれほどの行相があるかということ説く。それによってまず、一切智性に関して「無という行相から不動という行相まで〔苦と集と滅〕諦各々に四つと道〔諦〕に十五と説かれる (IV-2)」といわれるのである。

そこで、苦諦の四つの行相に関していわれる。[1]「世尊よ、つまりこの般若波羅蜜多は無という波羅蜜多である」「スプーティよ、虚空は存在しないからである」というのは、無常の境界は無を境界とするという道理によるのである。[2]「この般若波羅蜜多は、等しいことという波羅蜜多である。一切法は認識されないことに等しいからである」というのは、苦の境界は不生なるものを境界とするという道理によるのである。[3]「この般若波羅蜜多は、離れたものという波羅蜜多である」「畢竟空であるからである」というのは、空の境界は事物が存在しないという道理によるのである。[4]まさに屈しないものという行相によって「〔一切〕法は認識されないからである」というのは、無我の行相である。それは一切の外道と共通ではないからである。

AAVはここで、[1]から[4]の各々を十六行相中の苦諦に対する無常、苦、空、無我という伝統的理解に基づいて説明している<sup>(10)</sup>。それによって[2]については「一切法は認識されないことに等しい」というPVSPの経文に対し、「苦の境界は不生なるものを境界とする」と説明していることになる。これは、四聖諦の各諦に対して四があるとする十六行相という概念の理解を前提とし、それを総合判断によってこの箇所適用したということになる。なお、ここでの引用経文は、「認識されない」という語を含む点で、PVSPS/Tから引用されたものと考えられる。

## 3.2.2 AAKV の解釈

次に、ヴィムクティセーナは以下のように注釈している。

thams cad shes pa nyid bstan nas da ni rnam pa kun mngon par rdzogs par rtogs pa'i phyir rnam pa kun mngon par byang chub pa ni yang kun mkhyen gsum po'i rnam pa bstan pa yin no/ / de la re zhiḡ / **dmigs pa'i khyad par bzung ba la/ / rnam pa zhes ni bya bar brjod/ / dmigs pa** ni dmigs pa rnams so/ / **rnam pa** ni mi mthun pa'i phyogs gang gis gang zhiḡ gnyen po'i phyogs ni chos yin te/ dper na rtag par 'dzin pa'i mi rtag pa la sogs pa lta bu'o/ / gnyen po'i phyogs kyang kun mkhyen gsum gyis bsdus par bstan pa'i phyir/ **kun mkhyen nyid ni rnam gsum phyir/ / de ni rnam pa gsum du 'dod/ / (IV-1cd)** ces bstan pa yin no/ / **rnam pa zhes bya ba'i don to/ / de la 'phags pa'i bden pa bzhi'i rten can du byas pa kun mkhyen gsum gyi dbang du byas nas bden pa gang la rnam pa ji snyed yod pa de bstan pa'i phyir/ med pa'i rnam pa nas bzung ste/ / mi g-yo ba yi rnam pa'i bar/ / bden pa so so la bzhi dang/ / lam de la ni bco lgar bshad/ / (IV-2)** ces bstan pa yin no/ /

de la sdug bsngal gyi bden pa rnam pa bzhi'i dbang du mdzad nas re zhiḡ [1]bcom ldan 'das 'di lta ste/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ma mchis pa'i pha rol tu phyin pa'o/ / rab 'byor nam mkha' med pa nye bar bzung ba'i phyir ro zhes gsungs pa yin no/ / nyan thos la sogs pa'i rnam pa ni thams cad shes pa'i mi rtag pa'i rnam pa'i shes rab kyi pha rol tu phyin pa nam mkha' med pa'i dpes med pa'i don ni rnam pa yin no/ / de bzhin du tshig so so la yang bya bar don bshad pa dang/ 'brel to/ / [2]mnyam pa nyid ces bya ba'i rnam pa ni de la 'di'i don bshad pa dang/ mtshams sbyar ba ni ji skad du mdo las/ bcom ldan 'das 'di ni mnyam pa nyid kyi pha rol tu phyin pa lags so/ / rab 'byor chos thams cad mi dmigs pa nye bar bzung ba'i phyir ro zhes bya ba yin no/ / bde ba dang/ sdug bsngal mi dmigs pa mnyam pa nyid kyi dbang du byas pa'i phyir ro/ / [3]dben pa'i rnam pa ni ji skad du/ 'di ni dben pa'i pha rol tu phyin pa lags so/ / shin tu stong pa nyid nye bar bzung ba'i phyir ro zhes gsungs pa yin no/ / shin tu stong pa nyid ni bdag rang dbang gi rdzas kyis stong pa'i phyir ro/ / [4]mi rdzi ba zhes bya ba'i rnam pa ni ji skad du/ 'di ni rdzi ba ma mchis pa'i pha rol tu phyin pa'o/ / chos thams cad dmigs su med par nye bar bzung ba'i phyir ro/ / bdag med pa'i rnam pas mi rdzi ba ni mu stegs thams cad dang thun mong ma yin pa'i phyir ro/ / de ltar de dag rim pa ji lta ba bzhin du mi rtag pa dang/ sdug bsngal ba dang/ stong pa dang/ bdag med pa'i rnam pa rnams sdug bsngal gyi bden pa'i rnam pa can yin par rig par bya'o/ /

(AAKV, C94b2-95a6; D85b1-86a4; G123a4-124a3; N91b1-92a4; P99b1-100a4)

一切智性が説かれたから、今や、一切相現等覚〔を説く〕から、一切の相を現前に覚るといふのはふたたび、三智の行相を説くのである。そこでまず、「所縁が区別して把握されたものを行相と説く (IV-1ab)」〔といわれる〕。「所縁」といふのは、諸々の所縁である。「行相」といふのは所対治であり、その能対治は法である。譬えば、〔誤って〕常住と把握する〔のに対する〕無常等のようなものである。能対治はまた、三つの一切智によってまとめて説かれるから「一切智性は三種であるからそれは三種として望まれる (IV-1cd)」と説かれるのである。〔それが〕「行相」といふ意味 (don) である。そこで、四聖諦が擲り所とする「三智」に関して諦にはどれほどの行相があるか、と説かれたから「無といふ行相から不動といふ行相まで〔苦と集と滅〕各々の諦に四つあり、道〔諦〕には十五と説かれる (IV-2)」と説かれるのである。

そこで、苦諦の四つの行相に関して、まず [1]〔経に〕「世尊よ、つまりこの般若波羅蜜多は無といふ波羅蜜多である」「スプーティよ、虚空は存在せず把握されないからである」といわれるのである。声聞等の行相は一切智の無常なる行相の般若波羅蜜多であり、虚空は存在しないという譬えによって、無を境界とするといふ行相である。同様に、各々の語 (tshig) も意味の説示とつながるのである。[2] 等しいことといふ行相といふのは、そこでこの意味の説示と段落がつながることを、経に「世尊よ、これは等しいことの波羅蜜多であります」「スプーティよ、一切法は認識されないと把握されるからである」といふのである。楽と苦が認識されないといふことで等しいことに関するからである。[3] 離れたものといふ行相は「これは離れたものといふ波羅蜜多であります」「畢竟空性と把握されるからである」といわれるのである。畢竟空といふのは、本性が自在な物として空であるからである。[4] 屈しないものといふ行相は「これは屈しないものといふ波羅蜜多である」「一切法は認識されないと把握されるからである」。無我の行相によって屈しないものといふのは、一切の外道と共通ではないからである。このように、それらは段階的に無常と苦と空と無我といふ行相が苦諦の行相に属すると知られるべきである。

AAKV は上記引用の末尾で、先の AAV と同様に伝統的な十六行相の理解を示しているがそれら一々に関してはここでは詳説しない。また [2] において AAV と異なる点は、「等しいこと」について苦の反対概念である楽を用いて「楽と苦が認識されないといふことで等しい」といふ説明を加えているといふことである。なお、引用経文に「認識されない」といふ語を含む点で、これは AAV と同じく PVSPS/T からの引用であると考えられる。

### 3.2.3 AASV の解釈

さて、ハリバドラは事智に関する苦・集・滅の三諦に対する行相について、それらの名前を列挙し、それらの定義を明確に示す。

thams cad mkhyen pa nyid gsum yongs su shes pa ni/ dbang du bya ba'i phyir yang rnam pa thams cad dang lam dang gzhi shes pa bsdu ba'i sgo nas/ thams cad mkhyen pa nyid gsum sgom par byed pas/ rnam pa kun mngon par rdzogs par rtogs pa/ gzhi shes pa yi bye brag rnam/ / rnam pa zhes bya mtshan nyid de/ / kun mkhyen nyid ni rnam gsum phyir/ / de ni rnam pa gsum du 'dod/ / (IV-1) ces bya ba gsungs te/ rtag pa la sogs par 'dzin pa mi mthun pa'i phyogs kyi gnyen po'i chos nyid kyi ngo bo nyid mi rtag pa la sogs pa la dmigs pa'i ye shes kyi bye brag rnam rnam pa nyid du rnam par gzhas pa ni mtshan nyid de/ de dag kyang thams cad mkhyen pa nyid gsum gyi bye brag gis rnam pa gsum kho nar bzhed do/ / [本文引用者省略]

de la thams cad shes pa nyid kyi dbang du byas nas/ [1]med pa dang/ [2]mi skye ba dang/ [3]dben pa dang/ [4]mi brdzi ba dang/ [5]gnas med pa dang/ [6]nam mkha' dang/ [7]brjod du med pa dang/ [8]ming med pa dang [9]'gro ba med pa dang [10]mi 'phrogs pa dang [11]mi zad pa dang [12]skye ba med pa'i rnam pa ste bcu gnyis ni go rim bzhin du sdug bsngal la sogs pa'i bden pa gsum gyi/ mi rtag pa la sogs pa'i mtshan nyid dag yin no/ / (AASV, C109a3-b1; D104b1-6; G144a4-b4; N115b3-116a1; P122b4-123a2)<sup>(11)</sup>

三つ〔各々〕の一切智性をよく知ることに關して、また全ての相と道の智をまとめるという方法で、三つの一切智性が修習せられる。それによって一切相現等覺を「事智の差別を行相と定義する。一切智性は三種であるからそれは三種として望まれる (IV-1)」と説く。〔誤って〕常住等と把握する所対治分に対する能対治分の法の自性である。無常等を所縁とする智の種 (bye drag, prakāra) が行相として安立されたものが相である。それらもまた三つの一切智性の差別によって三種のみであると説くのである。〔本文引用者省略〕

その〔三智の〕中で、一切智性に關して [1] 無, [2] 不生, [3] 離れたもの, [4] 屈しないもの〔釈文引用者省略〕, [でありこれらの〕十二種は順次に苦などの三諦について無常なるもの等を相とする。

AASV では、経文は引用せずに各行相の名称のみを列挙する。上記引用の末尾にあるように、苦諦から滅諦までの三諦について、伝統的な十六行相理解を示していることは谷口氏によって指摘されている (谷口 2002, 229-30)。また、既に兵藤氏によって指摘されているように (兵藤 2000, 184)、苦諦の第二行相を [2] 不生 (mi skye ba, anutpāda) とする記述は、経文中に見出すことができず、かつこのように定義した理由がここでは述べられない。

### 3.2.4 SM の解釈

そしてラトナーカラシャーンティは、[2] については次のように注釈している。

da ni rnam pa kun mngon par rdzogs par rtogs pa zhes bya ba brjod par bya ba yin pa de bas na/ gzhi yi ye shes bye brag ni/ / rnam pa zhes bya mtshan nyid de/ / (IV-1ab) zhes bya ba gsungs te/ gzhi ni dmigs pa ste/ bden pa bzhi la sogs pa'o/ / de'i ye shes kyi bye brag ste/ rnam pa gang dag gi de yongs su shes par bya ba de dag rnam pa zhes bya'o/ / mtshan nyid ni ming ngo/ / kun mkhyen pa dag rnam gsum phyir/ / de yang rnam pa gsum du 'dod/ / (IV-1cd) ces bya ba la/ kun mkhyen pa dag ces bya ba ni rigs kyi mang po'i tshig yin te/ thams cad mkhyen pa nyid la zhes bya ba'i don to/ / de la thams cad shes pa nyid kyi dbang du mdzad nas/ med pa'i rnam pa nas bzung ste/ / mi g-yo ba yi rnam pa'i bar/ / bden pa so so la bzhi dang/ / lam la de ni bco lngar bshad/ / (IV-2) ces bya ba gsungs ste/

'di ni ma mchis pa'i pha rol tu phyin pa zhes bya ba med pa'i rnam pa nas bzung ba dang/ 'di ni mi g-yo ba'i pha rol tu phyin pa zhes bya ba mi g-yo ba'i rnam pa'i bar nyi shu rtsa bdun no/ / de dag la sdug bsngal dang kun 'byung ba dang 'gog pa la bzhi bzhi dang/ lam gyi bden pa la hlag ma bco lnga'o/ / med pa'i rnam pa'i pha rol tu phyin pa ni med pa'i rnam pa'i pha rol tu phyin pa'o/ / de bzhin du 'og ma thams cad la yang ngo/ / de la sdug bsngal gyi bzhi ni [1]med pa dang/ [2]mnyam pa nyid dang/ [3]dben pa dang/ [4]thub pa med pa'o/ / [1]med pa ni gzugs la sogs pa nam mkha' lta bu'o/ / [2]mnyam pa nyid ni gzugs la sogs pa chos thams cad dmigs su med pas mnyam pa nyid kyi phyir ro/ / [3]dben pa ni shin tu stong pa nyid kyi phyir ro/ / [4]thub pa med pa ni chos thams cad dmigs su med pa'i phyir ro/ /

(SM, C147a2-b1; D147a3-b2; G217b2-218a3; N158a6-b5; P171a5-b4)

## — 『現觀莊嚴論』注釈書に引用される『般若経』 —

今、一切相現等覚というものが説かれるべきである。それは「事〔とそれを知る〕智には諸種があり、〔それらの〕行相が〔その〕相である (IV-1ab)」といわれる。「事」は〔智の〕所縁であって、それは四聖諦等である。その智の「種」をよく知るべき「行相」という。「相」というのは名である。「一切智は三種であるからそれらもまた三種と望まれる (IV-1cd)」といわれるところの「諸々の一切智」というのは、種類の多い語であって、〔ここでは〕一切智性という意味である。そこで一切智性に関して「無という行相から不動という行相まで各諦に四つと道諦に十五と説かれる (IV-2)」といわれる。

これは「無という波羅蜜多」という「無という行相」から、「これは不動という波羅蜜多」という「不動という行相」までの二十七である。それらは苦と集と滅〔の各々の諦〕に四つと、道諦に残りの十五である。無という波羅蜜多は、無という行相の波羅蜜多である。このように後の全てもまた〔同様〕である。その中で、苦〔諦〕の四とは [1] 無と、[2] 等しいことと、[3] 離れたものと、[4] 屈しないものである。[1] 無というものは、色等が虚空の如くであるということである。[2] 等しいことというものは、色等の一切法は認識されないで、まさに等しいからである。[3] 離れたものというものは、まさに畢竟空だからである。[4] 屈しないものというものは、一切法は認識されないからである。

SM はここで、以前の AAV, AAKV, AASV に見られた伝統的な十六行相の理解は示していない。また [1] から [4] については単に経文の記述を再説しているだけであり、[2] については、AAKV が一切法を楽と苦として提示していたのに対し、ここでは色等の一切法と述べている。なお、ここでの引用経文は「認識されない」の語を含むことから、AAV, AAKV と同様に PVSPS/T である。

### 3.3 まとめ

まず、上記の注釈書における引用経文という点においては、AAV, AAKV, SM は PVSPS/T を引用している。ただし AASV は経文を引用することがなく、また [2] については、PVSPK, PVSPS/T のいずれともその定義が一致していない。なお、PVSPT はチベットの伝承ではハリバドラに帰せられるものの、それに先行するアーリア・ヴィムクティセーナの AAV とヴィムクティセーナの AAKV がこの経文を引用していることから、PVSPT の成立は両ヴィムクティセーナ以前に遡らなければならないことになる。PVSPT のハリバドラ作 (或いは編集) については既に疑義が出されている<sup>(12)</sup>が、この点については同様に疑義を提したい。

## 4 ASP の経文と釈文

ここでは、先の PVSP 経文と AASV の定義との間に相違が生じていた箇所について、ASP 本文として ASPA と ASPB とを提示し、その後に注釈者による釈文を確認する。ASPS は ASPB とほぼ一致することから注にて示すこととする。

### 4.1 ASP 経文の記述

はじめに、ASPA の経文は以下のとおりである。

bcom ldan 'das chos thams cad dmigs su ma mchis pa'i slad du/ 'di ni [2]mnyam pa ma mchis pa'i pha rol tu phyin pa'o// (ASPA, Fc150a2-3; K113b1-2; L144a8-b1; T133a4-5.)

「世尊よ、一切法は認識されないから、これは [2] 無等という波羅蜜多である」

このように、ASPA の経文は非常に簡潔である。次の ASPB には若干の相違がみられる。

## — 『現觀莊嚴論』注釈書に引用される『般若経』 —

bcom ldan 'das chos thams cad dmigs su ma mchis par mnyam pa'i slad du 'di ni [2]mi mnyam pa dang mnyam pa nyid kyi pha rol tu phyin pa'o/ / (ASPB, C156a2; D114a7; Fa175b4-5; Fb151a1-2; N181a5-6; P123a1; S158a7.)  
「世尊よ、一切法は認識されないことに等しいから、これは [2] 無等等という波羅蜜多である」<sup>(13)</sup>

このように、ASP 系統は PVSP 系統等とは定型句が異なるものの、*x* と *y* という記述は共に見出され、*x* にあたるものが 173 行相にて採用されるタームと一致していることになる。また、ASPA と ASPB との間で記述に相違が見られるものの中に [2] の定義がある。つまり、ASPA では [2]「無等 (mnyam pa ma mchis pa)」とするが、ASPB/S では [2]「無等等 (mi mnyam pa dang mnyam pa nyid, asamasamatā)」とする。この箇所に対応する PVSP 系統はみな「等 (mnyam pa nyid, samatā)」としていたことは先述した。この他に下線にて示したとおり、ASPB/S には「等しい」という語が付加されている<sup>(14)</sup>。

## 4.2 釈文の記述

上述のとおり [2] (苦諦の第二行相) の定義に関しては、ASPS と ASPB は一致しているものの、いずれにしるハリバドラが AASV にて定義した「不生」の語とは一致しない。

### 4.2.1 AAA の解釈

この箇所について、ハリバドラは AAA において次のように注釈している。

yongs su shes par gyur pa'i thams cad mkhyen pa nyid gsum po/ dbang du bya ba'i phyir yang rnam pa dang lam dang gzhi shes pa thams cad bsdu ba'i sgo nas thams cad mkhyen pa nyid gsum sgom par byed par byed pa yin pas/ rnam pa kun mngon par rdzogs par rtogs pa brjod par bya'o/ / de la re zhig rtag pa la sogs par 'dzin pa mi mthun pa'i phyogs kyi gnyen po'i chos kyi ngo bo nyid mi rtag pa la sogs pa la dmigs pa'i shes pa'i bye brag rnam rnam pa nyid du rnam par gzhag pa ni spyi'i mtshan nyid yin par shes par bya ste/ de bas na 'di la gzhi med pa'i nyes pa 'byung bar mi 'gyur ro/ / rnam pa de dag kyang thams cad mkhyen pa nyid gsum gyi bye brag gis rnam pa gsum kho nar bzhed do zhes gzung bar bya'o/ / de 'di skad du yang/ gzhi shes pa yi bye brag rnam/ / rnam pa zhes bya mtshan nyid de/ / kun mkhyen nyid ni rnam gsum phyir/ / de ni rnam pa gsum du 'dod/ / (IV-1) ces gsungs pa yin no/ /

de la 'phags pa'i bden pa rten du byas te/ thams cad mkhyen pa nyid gsum gyi dbang du byas nas bden pa gang la rnam pa ji snyed yod par 'gyur ba'i rnam pa de yongs su ston pa las/ re zhig thams cad shes pa nyid kyi dbang du byas nas/ de skad ces bka' stsal pa dang/ bcom ldan 'das la tshe dang ldan pa rab 'byor gyis 'di skad ces gsol to/ / zhes bya ba la sogs pa yin no/ / [1]'di ni ma mchis pa'i pha rol tu phyin pa'o/ / zhes bya ba ni nam mkha' dang 'dra bar rtag pa'i rang bzhin du ma mchis pa ste/ yod pa ma yin pa'i slad du ste/ rgyur byas nas ma mchis pa ni mi rtag pa'i rnam pa zhes bya ba'i tha tshig go / [2]mi mnyam pa dang mnyam pa nyid kyi zhes bya ba ni chos thams cad mi dmigs pa dang 'dra bar mnyam pa nyid yin zhing ma skyes pa yin pa'i slad du sdug bsngal ba'i rnam pa rnam pa gzhan dang mi 'dra ba nyid kyis na mi mnyam zhing 'dra ba med la de ni de kho na nyid du mnyam nyid de ma skyes pa'o/ / [3]dben pa'i zhes bya ba ni shin tu ste/ gtan nyid nas bdag stong pa'i slad du stong pa nyid kyi rnam pa'i yon tan thob par byed pa nyid kyis na dben pa'o/ / [4]mi brdzi ba'i zhes bya ba ni chos thams cad ni bdag nyid du mi dmigs pa'i slad du mu stegs pa thams cad dang thun mong ma yin pa'i phyir mu stegs pa rnam kyis 'khrugs par mi byed pa nyid kyis na bdag med pa'i rnam pa ni mi rdzi ba yin no/ / de ltar na [1]med pa dang [2]mi skye ba dang [3]dben pa dang [4]mi brdzi ba'i rnam pa bzhi ni sdug bsngal gyi bden pa la grangs ji lta ba bzhin du mi rtag pa la sogs pa'i mtshan nyid du 'gyur ro/ /

(AAA, C181b5-182a7; D176a2-b3; G262a1-b5; N203b2-204a5; P215a7-216a3)<sup>(15)</sup>

よく知られる三つの一切智性に関して、さらに相と道と事のすべての智をまとめるという方法で三つの一切智性が修習せられる。それによって、一切相現等覚が説かれるべきである。そこでまず、〔誤って〕常住等と把握する所対治分に対する能対治の法の自性は無常等である。所縁となる智の種が行相として安立されるものが、総相であると知られるべきである。その場合、ここに存在しない事物の過失は起こらないであろう。それらの行相もまた三つの一切智性の種によって三種のみと説かれるといわれる。それはまた「事

## — 『現觀莊嚴論』 注釈書に引用される『般若経』 —

〔とそれを知る〕 智には諸種があり、〔それらの〕 行相が〔その〕 相である。一切智性は三種であるからそれらは三種として望まれる (IV-1)』といわれるのである。

そこで、〔四〕 聖諦に依拠して三つの一切智性に関して、諦はあらん限りの行相を良く説くことから、〔経に〕 「具寿スプーティは世尊にこのように言った」等というのである。[1] 「これは無という般若波羅蜜多である」というのは、虚空のように常の本性としては無であり、有ではないからである。因は作られないことが、無常の行相という意味である。[2] 「無等および等 (無等等)」というのであるが、〔まず、等というの〕 一切法が認識されないように等しく不生であるから〔等〕 であり、〔また無等というの〕 苦の行相は他の行相と異なることによって、無等、無比である〔ことによってつまり無等である〕が、真実には、それは等しく不生なのである。[3] 「離れたもの」というのは、畢竟、究極的に本性として空性であるから、空性の行相の功德を得ようとするときに、離れるのである。[4] 「屈しないもの」というのは、一切法は本性として無所縁であって一切の外道と共通ではないから、まさに外道らが動揺せられるときに、無私の行相は屈しないのである。そのように、[1] 無、[2] 不生、[3] 離れたもの、[4] 屈しないという四つの行相は、苦諦について数〔で示した〕 ように無常等の相となる。

ハリバドラはこの AAA において、先の AASV と同様に伝統的な十六行相の理解を示している。また、苦諦の第二行相を「不生」と定義している。この点において、AASV と AAA は同様の説を示している。ただし、AASV では第二行相を「不生」とする理由が述べられていなかったのに対し、ここではそれが明らかにされている。つまり「一切法は認識されない」という点から、「真実には」という限定のもとに「不生」であるということを強調している。このような主張はまた、AAV が第二行相に対する釈文において「苦の境界は不生なるものを境界とする」とする理解に沿ったものといえる。以上の点から、AASV において苦諦の第二行相について、ハリバドラが経文には存在しない「不生」を定義付けた背景として、次の二点が考えられる。それはまず AAV の理解を受けたものであること、また AAA の釈文を前提とすることによって AASV における簡略化された説示の内容を理解することが可能となること、である。なおここでの [2] の定義は「無等等」であるから ASPB からの引用経文である。

## 4.2.2 SU の解釈

次にラトナーカラシャーンティは、SU において [2] について次のようにいう。

thams cad mkhyen pa nyid rnam pa gsum gyi mtshan nyid bstan nas/ sbyor ba bstan par bya ste/ de yang rnam pa kun mngon par rdzogs par rtogs pa yin la/ de bstan pa'i phyir du bstan bcos las/ rnam pa sbyor ba bcas pa dang/ / yon tan skyon ni mtshan nyid bcas/ / thar dang nges 'byed cha mthun dang/ / slob pa phyir mi ldog pa'i tshogs/ / (I-12) srid dang zhi ba mnyam nyid dang/ / zhing dag bla na med pa ni/ / rnam kun mngon rdzogs rtogs pa ste/ 'di ni thabs mkhas bcas pa yin/ / (I-13) zhes bya ba gsungs pa yin te/ rnam pa dag dang/ sbyor ba dag dang/ yon tan dag dang/ skyon dag dang/ mtshan nyid dag dang/ thar pa'i cha dang mthun pa dang/ nges par 'byed pa'i cha dang mthun pa dang/ phyir mi ldog pa'i dge 'dun dang/ 'khor ba dang mya ngan las 'las pa mnyam pa nyid dang/ sangs rgyas kyi zhing yongs su dag pa dang/ thabs la mkhas pa ste/ dngos po bcu gcig ni rnam pa kun mngon par rdzogs par rtogs pa'o/ / ji ltar bstan pa bshad pa la/ dang po'i rnam pa bshad pa ni bstan bcos las/ gzhi dang ye shes rnam pa yi/ / rnam pa shes bya mtshan nyid de/ / kun mkhyen nyid ni rnam gsum phyir/ / de ni rnam pa gsum du 'dod/ / (IV-1) ces bya ba gsungs te/ gzhi ni dmigs pa ste/ 'phags pa'i bden pa bzhi la sogs pa'o/ / de'i ye shes de nyid rnam pa ni rnam pa gang gis de yongs su shes par bya'o/ / de dag gi rnam pa zhes bya ba'i mtshan nyid ni ming ngo // rnam pa thams cad mkhyen pa rnams zhes bya ba'i tshig yin yang/ rigs kyi dbang du byas nas thams cad mkhyen pa nyid ces bya ba'i don to/ / de rnam pa gsum ji ltar yin zhe na/ thams cad shes pa nyid dang/ lam shes pa nyid dang/ rnam pa thams cad mkhyen pa nyid do/ / de la dang po thams cad shes pa nyid kyi rnam pa nyi shu rtsa bdun te/ 'dir bstan bcos las/ med pa'i rnam pa nas bzung ste/ / mi g-yo ba yi rnam pa'i bar/ / bden pa so so la bzhi dang/ / lam la de ni bco lngar bshad/ / (IV-2) ces gsungs te/ 'di ni ma mchis pa'i pha rol tu phyin pa'o zhes bya ba [1] med pa'i rnam pa nas brtsams nas/ mi g-yo ba'i pha rol tu phyin pa zhes bya ba ni [2] mi g-yo ba'i rnam pa'i bar ro // de dag las sdug bsngal dang/ kun 'byung ba dang/ 'gog pa dag la bzhi bzhi dang/ lam gyi bden pa la ni lhag ma bco lnga'o/ / ma mchis pa yang yin la pha rol tu phyin pa yang yin pas na/ ma mchis pa'i pha rol tu phyin pa'o/ / de bzhin du 'og ma dag la yang sbyar ro/ / de la sdug bsngal

gyi bzhi ni [1]med pa dang/ [2]mnyam pa nyid dang/ [3]dben pa dang/ [4]mi rdzi ba'o' // [1] nam mkha' ma mchis pa zhes bya ba ni nam mkha' ma mchis pa bzhin du gzugs la sogs pa med pa ste/ ji ltar nam mkha' gzugs can gyi rdzas med pa'i mtshan nyid yin pa de bzhin du/ gzugs la sogs pa rang gi mtshan nyid med pa'o' // [2] chos thams cad dmigs su ma mchis pa dang mnyam pa zhes bya ba bde ba dang/ sdug bsngal gyi chos thams cad dmigs su med par mnyam pa nyid do' // [3] shin tu stong pa zhes bya ba ni gang zag gi ngo bos stong pa nyid ces bya ba'i don to' // [4] gnod par byed pa ni sdug bsngal lo' /gnod par byar rung ba yin par brdzi ba'i bdag nyid do' /mi brdzi ba'i bdag nyid ni bdag med pa ste/ de'i rnam pa yin pa'i phyir mi brdzi ba'i pha rol tu phyin pa ste/ chos thams cad gnod par bya ba dang/ gnod par byed pa rnam dmigs su med pa nyid kyis mi dmigs pa nyid do' // (SU, C114b1-115a6; D112b6-113b3; G162b2-163b4; N128a6-129a5; P128b8-129b7)<sup>(16)</sup>

三つの一切智性の行相の相を説いてから、〔次に〕加行が説かれる。それはまた一切相現等覚であり、それを教えるために、本頌に、「行相、加行と、功德、過失、相、順解脱分と順決択分の二つ、有学の不退衆、有と寂靜の平等性、無上で清浄なる国土、方便善巧、こ〔の十一〕が一切相現等覚である (I-12~13)」と説かれている。「諸々の行相、諸々の加行、諸々の功德、諸々の過失、諸々の相、順解脱分、順決択分、不退衆、輪廻と涅槃の平等性、清浄なる仏国土、善巧方便」という十一事が「一切相現等覚」である。そのような教えが説かれたので、はじめの行相の説は、本頌に、「事〔とそれを知る〕智には諸種があり、〔それらの〕行相が〔その〕相である。一切智性は三種であるからそれは三種と望まれる (IV-1)」と説かれる。「事 (gzhi)」とは、〔事智が対象とする〕所縁であり〔それは〕、四聖諦等である。まさにその「智の種」は、その諸々の形態によって知られる。それらの「行相」という「相」は名である。一切智という語であるもまた〔それは〕種類に従って (jātau, rigs kyi dbang du)〔決定が〕なされるから、一切智性という意味である。何が三つの行相かという、一切智性と道智性と一切相智性とである。その中で、はじめに一切智性の行相は二十七である。これを本頌に、「無という行相から不動という行相であり、それらは〔各〕諦に対して四つあり、道〔諦〕には十五あると説かれる」といわれる。〔事智の苦諦の二十七とは、〕「これは無という波羅蜜多である」という [1]「無という行相」から、「不動という波羅蜜多」という [27]「不動という行相」までである。それらに、苦と集と滅〔の三つの諦〕に各々四種と、道諦における余りの十五で〔あわせて二十七で〕ある。無〔という行相に対して〕、波羅蜜多であるので、無という波羅蜜多である。〔以下〕同様に語尾にまた〔波羅蜜多を〕付けるのである。その〔二十七の〕中で、苦〔諦〕の四つというのは、[1]無と、[2]等しいことと、[3]離れたものと、[4]屈しないものである。[1]「虚空が存在しない」というのは、虚空が存在しないように色等は存在しない。虚空を体とする無実体の相のように、色等には、自相が存在しないのである。[2]「一切法が認識されないことに等しい」というのは楽と苦の一切法が認識されないことに等しいことによるのである。[3]「畢竟空」というのは、ブドガラの自性が空性という意味である。[4]損なわれてよいのであるから、〔それが〕屈するであろう我である。損なわせしめるものとは、苦である。〔それはまた〕損なわれてよいので屈するであろう我である。屈しないであろうその我とは、無我であり、その行相であるから、屈しない波羅蜜多である。一切法は損なわれるものと、損なわせしめるものがまさに認識されないことによってそれは無所縁なのである。

ラトナーカラシャーンティはこのSUにおいて、先のSMと同様に伝統的な十六行相理解には触れていない。この点でSMとSUは一貫した態度を示している。ただしSUでは第二行相に関してAAKVと同様に「楽と苦の一切法」と説明しているが、SMでは「色等の一切法」と説明していたので、「一切法」という概念の外延が、SMとSUとで異なっている。また、SUは第二行相を「等 (mnyam pa nyid, samatā)」と定義付ける。これはASPA/B/Sと一致せず、むしろPVSPK/S/Tと一致する。この点でもSMとSUの定義付けは一貫している。このようにSUが定義付ける第二行相と現存するASPとでは記述が異なる。ただし、注(14)に示したように、『道行般若經』には「等」とあることから、SUが依拠したASPは現存するASPとは異本であった可能性も考えられる。なお、「一切法は認識されないことに等しい」とあることから、ASPBからの引用である。

#### 4.2.3 MKの解釈

また、アバヤーカラグプタはMKにおいて[2]について次のようにいう。

de la rnam pa'i bshad pa ni bstan bcos las/ gzhi shes pa yi bye brag rnam/ / rnam pa zhes bya'i mtshan nyid de/ / kun mkhyen nyid ni rnam gsum phyir/ / de ni rnam pa gsum du 'dod/ / (IV-1) ces te/ gzhi la dmigs pa'i bden pa bzhi la sogs pa la/ de'i shes pa de'i bye brag rnam te/ gang gi de yongs su shes pa de rnam kyi rnam pa zhes pa ni mtshan nyid kyi ming la/ de la thams cad shes pa'i rnam pa ni nyi shu rtsa bdun te/ 'dir bstan bcos las/ med pa'i rnam pa nas bzung ste/ / mi g-yo ba yi rnam pa'i bar/ / bden pa so so la bzhi dang/ / lam la de ni bco lngar bshad/ / (IV-2) ces te/ de la sdug bsngal gyi bden pa la bzhi ste/ [1]med pa dang [2]mnyam pa nyid dang [3]dben pa nyid dang [4]mi brdzi ba ni de'i rnam pa'i phyir de'i pha rol tu phyin pa nyid do/ / [1]nam mkha' ni med pa nyid la/ nam mkha' bzhin du gzugs la sogs pa yang med pa nyid do/ / [2]chos thams cad dmigs su med pa nyid ni bde ba dang/ sdug bsngal ba dag mnyam pa nyid de/ gzhung kha cig tu ni mi mnyam pa dang mnyam pa nyid ces te/ mi mnyam pa ni sdug bsngal la/ de yis mnyam zhes pa'i don to/ / [3]shin tu stong pa nyid ni gang zag dang rang bzhin gyis stong pa nyid do/ / [4]gnod pa po sdug bsngal gyis gnod par bya ba'i phyir na brjod pa ni bdag la/ rdzi ba med pa ni bdag med pa ste/ de'i rnam pa'i phyir ni mi rdzi ba'i pha rol tu phyin pa nyid de/ chos rnam thams cad la gnod bya dang gnod byed mi dmigs pa nyid kyi dmigs su med pa'i phyir ro/ /

(MK, C128b4-129a3; D125b1-6; G181a3-b3; N145a7-b6; P144a2-b1)

そこで、行相の説示は、本頌に「事〔とそれを知る〕智には諸種があり、〔それらの〕行相が〔その〕相である。一切智性は三種であるからそれらは三種として望まれる (IV-1)」といわれる。「事」を所縁とする四諦等であるが、それを知るのがその「種」である。よく知られるそれらの「行相」が「相」と名づけられ、その中、一切智の行相は二十七である。これが本頌に、「無という行相から不動という行相までの〔各〕諦に各々四つあり道〔諦〕に十五と説く (IV-2)」といわれる。

その中で、苦諦に対して四である。[1] 無、[2] 等しいこと、[3] 離れたもの、[4] 屈しないものというのは、そのような行相であるから、まさにその波羅蜜多である。[1] 「虚空は存在しない」のであり、虚空のように色等もまた存在しないものである。[2] 「一切法は認識されない」というのは、楽と苦が等しいことであって、ある典籍 (gzhung kha cig) には「無等等性 (mi mnyam pa dang mnyam pa nyid)」とある。無等というのは苦〔の行相〕についてであるが、そ〔の一切法は認識されないという点で〕は等しいという意味である。[3] 「畢竟空性」は、我と本性によって、空性である。[4] 損なうものというのは、苦によって損なわれるときに説かれるのが我であるが、「屈しない」というのは無我である。そのような行相であるから、屈しないという波羅蜜多である。一切法を損ない、そして損なわせしめるその無所縁は認識されないからである。

MK はここで、「楽と苦が等しいこと」と述べているが、これは先の AAKV, SU と同様の説明である。なお、ここで引用される経文は「等しい」という語がないことから、ASPA を引用しているものと考えられる。このことは、「無等等」(ASPB/S) を異本として扱っている点からも裏付けられるだろう。また、AAV 等にみられた伝統的な十六行相理解に関しては、はじめの無常については説明がないものの、[2] 苦、[3] 空性、[4] 無我を挙げているからその影響を受けているものと考えられる。

### 4.3 まとめ

まず、上記の注釈書における引用経文という点に関して、AAA, SU は ASPB/S を引用しているが、MK は ASPA を引用している。つまり、MK がここで底本として見ているテキストは、AAA, SU が見ているそれと異本と考えられる。そればかりではなく MK は、AAA と SU が見ているテキストである ASPB/S を異本として扱い、その存在を知っていながらも ASPA の方を採用していることになる。つまり、諸 ASP 釈文において第二行相に関して「無等等」について言及するのは AAA と MK のみである。またその中、MK は「無等等」の経文を異読として扱っていることは先に引用にて示したとおりである。しかしながら、MK においてアバヤーカラグプタは異読としての「無等等」を挙げながらも、それを退けることはなく、自説にとりこみながら説明を加えている。ただし、ハリバドラが AAA において「無等等」に対する解釈から「不生」を導くのに対して、アバヤーカラグプタは「無等というのは苦〔の行相〕について

であるが、その「一切法は認識されないという点で」は等しい」とだけ述べる。

さて、SUでは「無等等」への言及は無く、SUの釈文中であげられる[1]から[4]の行相の中、[2]「等しいこと」は現存するASPには見出すことができない。漢訳を参照することで異本の存在も想定し得るが現存するASPでは、「無等」(= ASPA)と「無等等」(= ASPB/S)のいずれかである。ここでのSUにおける四種の行相はSMと同一であることから、ラトナーカラシャーンティは[1]から[4]までの行相に関してAAV, AAKVそして自著であるSMでの定義を、SUに適用させたものと考えられる。ただしそこで適用されたのは項目のみであり、それら各々を釈す際にはASPB/Sの経文に依拠している。それによって、そこで行相の項目名と現存するASPとの経文との間に差異が生じてしまっている。

なお、AAAは第二行相について、「無等等」の経文を引用しながらも、「不生」ということを強調する。この点においてハリバドラの立場は、AASV, AAAともに一貫したものであり、かつ先に確認したように、経文に存在しない「不生」の語を定義として用いる前提として、AAVによる十六行相に対する伝統的理解があったものと推定される。また、ハリバドラが第二行相を「不生」と定義した経緯を辿ると、項目名のみをあげるAASVの前提として、AAAに述べられる「不生」に対する理解が先行していたと考えられる。

## 5 考察とまとめ

本稿で得られた結果に基づいて、特に現存注釈書類が依拠したテキストについてまとめると次のようになる。

【表2】現存テキストと現存注釈書が依拠したテキストとの比較

	AAの影響	現存テキスト	現存注釈書
PVSP系統	無	PVSPK	
	有	PVSPS/T	AAV, AAKV, (AASV,) SM
ASP系統	無	ASPA	(MK)
	有	ASPB/S	AAA, SU

ASP系統では、ASPAは173行相と法数の総数、またタームが異なり、両者の一致が困難である。一方でASPBは173行相を満たしており、このことから法数を合わせるための経文の改変、付加がなされたことが想定され、かつASPAを考慮すると不要な経文が幾つか削除されたものと考えられる(本稿末尾の付記を参照)。この点から、ASPBと一致するASPB/Sは、AAの成立を前提とすることになる。このことは、当然のことながら、AAが注釈対象としたPVSP系統の成立をも前提とすることになる。つまり、ASPは、一度全体像がまとまった(= ASPA)後で、AAの思想・教理をASPにまで相応させようとする流れにそって、経文が再編された(= ASPB/S)ことになる。以上のことは、チベット語訳に2種の系統のASPが現存していることに基づき明確化される。ASPAとASPBとの間における第二行相の記述の相違に関してこのような背景を考慮すると、次のような経文改変の経緯が想定される。

(1)mnyam pa ma mchis pa + (2)mnyam pa nyid = (3)mi mnyam pa dang mnyam pa nyid  
 (\*asama) (samatā) (asamasamatā)  
 ASPA PVSPK/S/T ASPB/S

## 略号表

- AA *Abhisamayālamkāra-prajñāpāramitōpadeśa-sāstra.*  
= 兵藤 2000; D3786 (Ka); P5184 (Ka).
- AAA (Skt.) Haribhadra. *Abhisamayālamkāralokā Prajñāpāramitāvyaḥyā.* = Tucci 1932; Wogihara 1932–35.  
(Tib.) Seng ge bzang po. \**Ārya-aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā-vyākhyāna abhisamayālamkāralokā-nāma*; 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa'i bshad pa mngon par rtogs pa'i rgyan gyi snang ba zhes bya ba. D3791 (Cha), P5189 (Cha).
- AAKV \*Vimuktisena; Rnam par grol ba'i sde, \**Ārya-Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitōpadeśasāstrābhisamayālamkāra-kārikā-vārttika*; 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi tshig le'ur byas pa'i rnam par 'grel pa. D3788 (Kha), P5186 (Kha).
- AASV (Skt.) Haribhadra, *Abhisamayālamkāra-kārikā-sāstra-vivṛti.* = Amano 2000.  
(Tib.) Seng ge bzang po, *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan ces bya ba'i 'grel pa.* D3793 (Ja), P5191 (Ja).
- AAV (Skt.) Ārya Vimuktisena, *Abhisamayālamkāravṛtti.* = Pensa 1967.  
(Tib.) 'Phags pa mnam par grol ba'i sde, \**Ārya-Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitōpadeśasāstrābhisamayālamkāra-vṛtti*; 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa. D3787 (Ka), P5185 (Ka).
- ADSP \**Ārya-aṣṭādaśasāhasrikā-prajñāpāramitā-nāma-mahāyāna-sūtra*; 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa khri brgyad stong pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo. D10 (Ka, Kha, Ga), P732 (Ni, Pi, Phi).
- ASPA \**Ārya-aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramiā*; 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa. Fc: Phug brag No.840, K: 蔵外 No.334 (東洋文庫), L: London No.647, T: 東京 (東洋文庫) No.31.
- ASPB \**Ārya-aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramiā*; 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa. C: Co ne No.1001, D: sDe dge No.12, Fa: Phug brag No.838, Fb: Phug brag No.839, N: sNar thang No.13, P: Peking (大谷大学) No.734, S: sTog No.15.
- ASPS *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā.* = Mitra 1888, Wogihara 1932–35, Vaidya 1960.
- DSP \**Ārya-daśasāhasrikā-prajñāpāramiā-nāma-mahāyāna-sūtra*; 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa khri ba zhes bya ba theg pa chen po'i mdo. D11 (Ga, Nga), P733 (Phi, Bi).
- MK \**Ārya-aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā-vṛtti marmakaundī-nāma*; 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa'i 'grel pa gnad kyi zla ba'i 'od ces bya ba. D3805 (Da), P5202 (Da).
- PVSPK \**Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā*; *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa.* D9 (Ka, Kha, Ga), P731 (Nyi, Ti, Thi, Di).
- PVSPS *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā.* = Kimura 1986/1990.
- PVSPT \**Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā*; *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa.* D3790 (Ga, Nga, Ca), P5188 (Ga, Nga, Ca).
- SM Rin chen 'byung gnas zhi ba, \**Abhisamayālamkāra-kārikā-vṛtti Śuddhamatī-nāma*; *mngon par rtogs pa'i rgyan gyi tshig le'ur byas pa'i 'grel pa dag ldan zhes bya ba.* D3801 (Ta), P5199 (Ta).
- SSPK \**Śatasāhasrikā-Prajñāpāramitā*; *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa.* D8 (Ka, Kha, Ga, Nga, Ca, Cha, Ja, Nya, Ta, Tha, Da, A), P730 (Ra, La, Sha, Sa, Ha, A, Kṣa, Ki, Khi, Gi, Ngi, Ci, Chi, Ji).
- SSPS *Śatasāhasrikā-Prajñāpāramitā.* Matsunami No.382, No.384 (東京大学).
- SU (Skt.) *Sāratamā.* = Jaini 1979.

## — 『現觀莊嚴論』 注釈書に引用される 『般若経』 —

(Tib.) Rin chen 'byung gnas zhi ba, \**Āryāṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā-pañjikā sārōttamā-nāma* ;  
*'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa'i dka' 'grel snying po mchog ces bya ba.*  
 D3803 (Tha), P5200 (Tha).

## 文献表

庄司 史生

2009 「チベット語訳『八千頌般若波羅蜜多』における系統分類とその基準」『佛教史学研究』52(1), pp. 1-22。

谷口 富士夫

2002 『現觀体験の研究』山喜房佛書林, 東京。

2006 「『現觀莊嚴論』における173行相」『印佛研』54(2), pp. 114-119。

兵藤 一夫

1984 「Bstan hgyur 所収の『二万五千頌般若』についての二・三の問題—特に『現觀莊嚴論』との関連において—」『日本西藏學會々報』30, pp. 7-12。

2000 『般若経釈 現觀莊嚴論の研究』文栄堂, 京都。

真野 龍海

1972 『現觀莊嚴論の研究』山喜房佛書林, 東京。

Amano, K.

2000 *Abhisamayālamkāra-kārikā-śāstra-vivṛti*. Kyoto: Heirakujishoten.

Chandra, L.

1981 *Aṣṭa-sāhasrikā prajñāpāramitā: a Sanskrit manuscript from Nepal*. New Delhi: Sharada Rani.

Jaini, P.S.

1979 *Sāratamā. A pañjikā on the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā Sūtra by Ācārya Ratnākaraśānti*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute.

Kimura, T.

1986/90 *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā II·III/IV*. Tokyo: Sankibo Busshorin.

Mitra, R.

1888 *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, A Collection of the Discourse of the Metaphysics of the Mahāyāna School of the Buddhist*. Calcutta: Bibliotheca Indica.

Pensa, C.

1967 *L'Abhisamayālamkāravṛtti di Ārya Vimuktisena, (Primo Abhisamaya)*. SOR XXXVII, Roma.

Tucci, G.

1932 *The commentaries on the Prajñāpāramitās*. Baroda: Oriental Institute.

Wogihara, U.

1932-35 *Abhisamayālamkāralokā Prajñāpāramitāvyākhyā*. Tokyo: Tōyō Bunko.

Vaidya, P.L.

1960 *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*. Dharbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

## 注

- (1) 「T<sub>1</sub>は梵本と同じく、弥勒造の現觀莊嚴論による科判を本文中に挿入しており、その意味で丹殊爾(論部)に属するものとされているのである」(Kimura 1986, iii)。上記引用中のT<sub>1</sub>は本稿でのPVSPTを指す。
- (2) 2種の系統とは『現觀莊嚴論』からの影響によって経文の増広を受けた後の系統(=現存Nepal系梵本『八千頌般若経』)と、それ以前の系統の2種である。つまり、現存Nepal系梵本は、AA

## — 『現觀莊嚴論』注釈書に引用される『般若經』 —

- の体系との関連付けのために経文の増広がなされた後のテキストである（拙稿 2009 を参照）。
- (3) この 173 行相を、don nam（対象行相）と shes nam（認識行相）という二つの概念で分類するというチベットの伝統については、谷口（2002, 83–99; 2006）によって指摘されている。
- (4) 173 という総数が AA 自体に明記されることはなく、それはアーリア・ヴィムクティセーナの AAV に次のように明示される。「それらすべてをひとつにまとめると、173 行相となるのである」  
de dag thams cad gcig tu bsdus na nam pa brgya bdun cu rtsa gsum du 'gyur ro // (D3787(Ka)127b6; P5185(Ka)150a6)
- (5) AA 第四章の釈文にあたる (AAV, D3787 (Ka) 119a7–128a4; P5185 (Ka) 139b4–150b5)。
- (6) Subhūtir āha: samatā-pāramitēyaṃ Bhagavan yad uta prajñāpāramitā. Bhagavān āha: sarvadharmānupalabdhi-samatām upādāya. (PVSPS, Kimura 1990, 1)  
スプーティは言った。「世尊よ、この等しいことという波羅蜜多はまさに般若波羅蜜多である」  
世尊は言った。「一切法は認識されないこと（不可得）に等しいからである」
- (7) 漢訳は、PVSPK と近似する（経文中の下線引用者、以下同様）。  
『放光般若經』等品第四十五（『大正新脩大藏經』（以下、『大正藏』）No.221, vol.8, 68a22–69a24）  
「世尊。波羅蜜等。答言。諸法等故。（68a24–25）」  
『摩訶般若波羅蜜經』遍歎品第四十四（『大正藏』No.223, vol.8, 311c15–313a25）「世尊。等波羅蜜是般若波羅蜜。佛言。諸法等故。（311c18–19）」  
『大般若波羅蜜多經』第二分不可得品第四十二（『大正藏』No.220(2), vol.7, 202a12–204a3）「世尊。如是般若波羅蜜多是平等波羅蜜多。佛言如是。以一切法性平等故。（202a15–16）」  
『光讚般若經』は完本ではなく、当該箇所を欠く。また漢訳では、173 種の行相が説示される箇所は、各々經典中の一つの章（品）を構成している。なお、漢訳注釈参考として、『大智度論』諸波羅蜜品第四十四（『大正藏』No.1509, vol.25, 518b2–522a5）では「經 世尊。等波羅蜜是般若波羅蜜。佛言。諸法等故。（518b4–6）」「論 菩薩得法忍。觀一切法皆平等。是故説一切法等故。言等波羅蜜。（518a11–13）」とする。
- (8) PVSP における定型句は次のとおりである。  
スプーティ「x 波羅蜜多 = 般若波羅蜜多である」  
世尊「y であるから」  
以上のようなスプーティと世尊による問答形式は、PVSPK/T/S の他に、DSP, ADSP, SSPK/S も同様である。  
ASP のみは、世尊に対するスプーティ独自の発言となり、定型句の形式が異なるものの、x と y を具えている点でその一連の文脈は、PVSP 系統と同一といえる。  
ASP における定型句は次のとおりである。  
スプーティ「y であるから、x 波羅蜜多である」
- (9) Obermiller (1933, 9–11) をはじめとして、真野 (1972, 13–15), (兵藤 2000, 8–16), 特に谷口 (2002, 15–43) に従来の研究史を含め論じられている。
- (10) AASV がこのような伝統的な十六行相説を踏襲していることについては、谷口 (2002, 229) を参照。
- (11) pariññāta-tri-sarvajñato vaśitvārthaṃ punaḥ sarvākāra-mārgga-vastu-jñāna-saṃgrahaṇa tri-sarvajñatām bhāvayatīti sarvākārābhisambodhim āha |  
**vastu-jñāna-prakāraṇām ākāra itī lakṣaṇam |**  
**sarvajñātānām traividhyāt trividhā eva te matā || 1 ||**  
iti | nityādi-grāhaka-vipakṣasya pratipakṣa-dharmmatā-svabhāvānām anityādy-ālambana-jñāna-prakāraṇām ākāratvena vyavasthāpanam lakṣaṇan | te ca tri-sarvajñatā-bhedāt tri-prakārā eva matā iti | samānyenākārān nirdeśyedānīm viśeṣenāha |  
**asad-ākāram ārabhya yāvan nīścalatākṛtiḥ |**  
**catvāraḥ prati-satyan te mārgge pañcadaśa smṛtā || 2 ||**  
iti | tatra sarvajñatādhikāreṇa [1]asad [2]anutpāda [3]viveka [4]anavamardanīya [5]apada [6]ākāśa [7]aprayāhāra [8]anāma [9]agamana [10]asaṃhārya [11]akṣaya [12]anutpatty-ākārā dvādaśa

## — 『現觀莊嚴論』注釈書に引用される『般若經』 —

- yathākramam anityādi-lakṣaṇā duḥkhādi-satya-traye (Amano 2000, 54)  
 拙訳に際し、真野 (1972, 169–70) と谷口 (2002, 229–30) を参照した。
- (12) 兵藤 (1984, 11) は、ハリバドラではなく「Ārya-Vimuktisena より後で、Ratnākaraśānti の前後までの、特に Ratnākaraśānti に時代的にも思想的にも近い人物 (彼自身も含む) の仕業ではないかと考えられる」とまとめておられる。
- (13) 現行梵本では [2]asamasamatā-pāramitēyaṃ Bhagavan sarva-dharmānupalabdhitām upādāya | (ASPS, Mitra 1888, 205.1–2; Vaidya 1960, 102.6; Wogihara 1932–35, 445) であるが、写本には asamasamatā-pāramitēyaṃ Bhagavan sarvva-dharmānupalabdhi-samatām upādāya | (Chandra 1981, 106b7) ともある。この場合では「世尊よ、これは [2] 等しくないこと及び等しいこと (無等等) という波羅蜜多である、一切法は認識されない (不可得) ことに等しいから」となり、ASPB と一致する。
- (14) 漢訳は、以下のように一様ではない。  
 『道行般若經』「等波羅蜜者於諸法悉平等。(『大正藏』No.224, vol.8, 444a17)」= PVSPK/T/S  
 『小品般若波羅蜜經』「世尊。正波羅蜜是般若波羅蜜。諸法平等故。(『大正藏』No.227, vol.8, 553a26–27)」= PVSPK/T/S  
 『大般若波羅蜜多經』第四分「是爲無等波羅蜜多。以一切法不可得故。(『大正藏』No.220(4), vol.7, 805a9–10)」= ASPA・『大般若波羅蜜多經』第五分「是爲正等波羅蜜多。以一切法性平等故。(『大正藏』No.220(5), vol.7, 887a29-b1)」= PVSPK/T/S  
 『佛母出生三法藏般若波羅蜜多經』「無等等波羅蜜多。是般若波羅蜜多一切法不可得故。(『大正藏』No.228, vol.8, 619b17–18)」= ASPB/S  
 以上のように、『道行』『小品』『五会』は PVSP 系統の「等」と一致し、『四会』のみが ASPA と一致し、『佛母』のみが ASPB/S と一致する。なお、『摩訶般若鈔經』は完本ではなく、当該箇所を欠く。また『大明度無極經』は当該箇所を見出すことができない。
- (15) pariññāta-tri-sarvajñatā-vaśitvārtham punaḥ sarv'ākāra-mārga-vastu-jñāna-saṃgrahaṇa tri-sarvajñatām bhāvayati sarv'ākārābhisambodho vaktavyaḥ. tatra: tāvan nity'ādi-grāhaka-vipakṣasya pratipakṣa-dharma-svabhāvānām anity'ādy-ālambana-jñāna-prakāraṇām ākāratvena vyavasthānaṃ sāmānyalakṣaṇaṃ jñeyam. ato nirvastuk'ākāra-doṣo nēha vijrmbhate. te c' ākāras tri-sarvajñatā-bhedāt tri-prakārā eva matā iti grāhyaṃ. tathācōktaṃ:  
**vastu-jñāna-prakāraṇām ākāraṇā itī lakṣaṇaṃ sarvajñatānām traividhyāt trividhā eva te matāḥ || itī. (1)**  
 tatra: catvāry ārya-satyāny adhiṣṭhānaṃ kṛtvā tri-sarvajñatā'dhikāreṇa yasmin satye yāvanto bhavanti ākāras tān paridīpayan sarvajñatā'dhikāreṇa tāvad āha: *evam ulte āyuṣmān Subhūtir Bhagavantam* ity-ādi. [1]asad-pāramitēyam itī ākārasāyēva nitya-rūpeṇāsattām avidyamānatām upādāya hetu-kṛtyāsad anity'ākāra ity arthaḥ. [2]asamasamatēti sarva-dharmānupalabdher iva samatām anutpādatām upādāya duḥkh'ākāro 'ny'ākāra-visadrśatvenāsamo 'tulyaḥ. sa tattvaḥ samatā'nutpādaḥ. [3]viviktēti atyantantīśayen'ātmanāḥ sūnyatām upādāya sūny'ākāra-guṇ'āvāhakatvena vivekaḥ. [4]anavamṛdyēti sarva-dharmānām ātmatvenānupalabdhitām upādāya sarva-fīrthikāsādhāraṇatvāt fīrthikākopyatvenānātm'ākāro 'navamardaniyaḥ. tad evam [1]asad-[2]anutpāda-[3]viveka-[4]anavamardaniy'ākārās catvāro yathāsaṃkhyam anity'ādi-lakṣaṇā duḥkha-satye bhavanti. (Tucci 1932, 285.16–286.17; Vaidya 1960, 415.1–16; Wogihara 1932, 445.11–446.4).
- (16) [73] ākāraḥ saprayogaśca guṇā doṣāḥ salakṣaṇāḥ |  
 mokṣanirvedhabhāgīye śaikṣo'vaivartiko gaṇaḥ || I-12 ||  
 samatā [74] bhavaśāntyoś ca kṣetraśuddhir anuttarā |  
 sarvākārābhisambodha eṣa sopāyakaśālaḥ || I-13 ||  
 ākāraḥ, prayojāṇāḥ, guṇāḥ, doṣāḥ, lakṣaṇāni, mokṣabhāgīyaṃ, nirvedhabhāgīyaṃ, avavartikasamghaḥ, saṃsāra-nirvaṇa-samatā, buddhakṣetrapariśuddhiḥ, upāyakaśālaṃ cēty ekādaśavastūni sarvākārābhisambodhaḥ | yathōddeśaṃ nirdeśāt prathamata ākāraṇāṃ nirdeśaḥ |  
 [75] vastu-jñāna-prakāraṇām ākāraṇā itī lakṣaṇaṃ |  
 sarvajñatānām traividhyāt trividhā eva te matāḥ || IV-1 ||

## — 『現觀莊嚴論』注釈書に引用される『般若経』 —

'vastu' ālambanam catuḥsatyādi | tasya 'jñānam' | tasya 'prakārah' | yaiḥ prakārais tat parikṣepaḥ  
teṣāṃ 'ākāra' iti lakṣaṇatvāt | 'sarvajñātānām' iti jātau bahuvacanam | sarvajñtāyā ity arthaḥ | katham  
tasyās traiviṣyam ? sarvajñatā mārgajñatā sarvākārajñatā cēti | tatrādaḥ sarvajñatākārāḥ saptaviṃśatiḥ  
| śāstram-

[76] **asadākām ārabhya yāvan niṣcalatākṛtiḥ |**

**catvāraḥ prati satyaṃ te mārga pañcadaśa smṛtāḥ || IV-2 ||**

*asatpāramitēyam* iti [1]asadākārām ārabhya yāvad acalapāramitēyam ity [27]acalākārāḥ | teṣu catvāraś  
catvāro duḥkha-samudaya-nirodha-satyēṣu pariviṣṭāḥ | pañcadaśā mārga-satyē | asadākārapāramitā  
| asatpāramitā | evam uttarā api sarvāḥ | tatra duḥkhe catvāraḥ [1]asat-[2]samatā-[3]  
vivikta-[4]anavamṛdyā | [1]*ākāśa-samatām* iti | ākāśavad-rūpāder asattām | yathā try-ākāśasya  
rūpidravayābhāvo lakṣaṇam tathā rūpādīnām svalakṣaṇābhāvaḥ | [2]*sarvadharmānupalabdhi-*  
*samatām* iti | sarvadharmānupalabdhir eva sukha-duḥkhayoḥ samatā | [3]*atyantaśūnyatām*  
iti | pudgalena svabhāvena ca śūnyatām ity arthaḥ | [4]bādhakam duḥkham bādhyatvād  
avamṛdyā ātmā | anavamṛdyā'nātmā | tad ākāratvāt *anavamṛdyapāramitā* | *sarvadharmānām*  
bādhyabādhakānāmanupalabdhitām *nirūpalambhatām* [upādāya] | (Jaini 1979, 83.20–84.24) I-12 偈の  
前の釈文はテキストに欠く (Jaini 1979, 83.note2 を参照)。

## 付記

本稿でとりあげた 173 行相中の第二行相の例のみによって、『般若経』と『現觀莊嚴論』の影響関係を論ずることは出来ず、またここでは紙幅の都合上、173 行相の用例全てを示し得なかった。口頭発表時には、「ASP(Tib.A)-(Tib.B)-(Skt.) 対照テキスト」、「三智の行相對照表」を配布した。前者は、三智の行相に関する ASPA, ASPB, ASPS の対照テキストである。後者は、同じく三智の行相に関する定義を ASPA, ASPB, ASPS, DSP, ADSP, T220(2), PVSPK, PVSPT, PVSPS, SSPK, AAV, AASV より採取し、表にまとめたものである。これら二点に基づいて、173 行相に関して諸『般若経』を比較すると、SSPK/S, PVSPK, ADSP, DSP, ASPA は三智の 173 行相と一致しない。一方で一致しているといえるのが PVSPS/T と ASPB/S のみであった。以下に所在のみであるが示しておきたい。それら対照テキストと訳注研究については他日に期したい。

- ADSP : D10 (Kha) 86a1–92b4, F9[#834] (Kha) 162a2–171b7, L247[69] (Kha) 172a6–180a6, P732 (Pi) 78b8–84b6, S13 (Kha) 179a5–189b4, T11 (Kha) 167a8–175b1.
- ASPA : Fc11[#840] (Ka) 150a1–152a6, K113a8–115a5, L647[110] (Ka) 144a7–146a7, T31 (Ka) 135a3–137a4.
- ASPB : C1001 (Ka) 155b8–158a6, D12 (Ka) 114a6–116a2, Fa11[#838] (Ka) 175b3–178a5, Fb11[#839] (Ka) 150b7–153b2, N13 (Ka) 181a4–184a2, P734 (Mi) 122b8–124b7, S15 (Ka) 158a6–161a2.
- ASPS : M204.19–207.17, V102.5–103.12, W445.5–457.8.
- DSP : D11 (Nga) 211a4–215a4, F10[#836] (Ka) 289a6–294a5, L644[102] (Kha) 18b7–23a6, P733 (Bi) 125b5–129b6, S14 (Kha) 20b1–25b4, T30 (Kha) 20a1–25b6.
- PVSPK : D9 (Kha) 217a1–222b1, F8[#831] (Ga) 24a3–31b3, L645[105] (Ga) 21a2–27a3, P731 (Thi) 3a6–8b8, S12 (Ga) 49b5–58a2, T10 (Ga) 40a8–48b4.
- PVSPS : Kimura 1990, 1.
- PVSPT : D3790 (Nga) 169a7–175a2, P5188 (Nga) 194b7–195a3.
- SSPK : D8 (Nya) 341b2–348a3, F7[#823] (Da) 212a7–221a7, L9[25] (Da) 155a1–162b1, P730 (Gi) 92a6–96b8, S9 (Da) 181b1–189b2, T9 (Da) 165b6–173a7.
- SSPS : No.382 fol.293b9–296a7, No.384 fol.353b7–356a1.
- T220(2) : 『大正蔵』 vol.7, 202a12–204a3.

以上